

に関するわが国の唯一の図鑑として、多くの人々によって愛用されてきた。しかしながら、この書は発行後すでに50年余を経過しているので、内容が新しく、より便利で、かつ、権威のある虫えい図鑑が出版されるのを皆待ち望んでいた。

このたび湯川淳一・榊田長両氏を中心とする23氏の協力により『日本原色虫えい図鑑』が刊行されたが、まさしくこの新しい図鑑は、長きにわたる学界の渴望を十分に満たす良書と言えよう。その内容の大略は、次のとおりである。本の最初に、主として植物の分類順に虫えいの原色写真が配列されているとともに、これらの虫えいの解説があり、むろん各虫えい形成昆虫などとの関連で記述されている。次いで、虫えいに関する一般解説〔研究史と近年の研究動向、発現機構、適応的意義、虫えいを形成する生物（昆虫・ダニ・線虫・微生物）の各論など〕が詳しく書かれている。このほか、虫えいをめぐる生物の世界、虫えいの採集と観察・飼育、虫えいを形成する害虫といった諸項目で解説がある。そして最後に、至れり尽くせりに完備している参考文献、付表、索引が延々約350頁にわたって掲載されていて、編者らのこの書ならびに虫えい学に対する並々ならぬ意欲のほどをひしひしと感ずる。このような参考文献、付表、索引の完備は、この書の学術的価値を著しく高めているのみならず、一般読者にとっても便利この上ない。すでにおわかりのように、本書は、単なる図鑑であるだけではなく、虫えい学の高度の専門書ともなっている。

一、二批判がましいことを言うとしたら、一つは、原色写真の各サイズをもう少し大きくして見やすくし、原色の総頁を30~50%増やすと良かったと思う。また、原稿が早くに集まっていたのに刊行がだいぶ遅延したためであろうと推測されるとはいえ、フシダニ類の学名には多少、問題がある。ダニの学名については、同じ出版社から発行されている『日本原色植物ダニ図鑑』（1993）との整合性がはかられていれば、読者はまごつくこともなく、しごく便利であったらうにと、惜しまれる。

この本は、日本および近隣諸国における今後の虫えい研究の進展に大きく役立つのは、間違いないであろう。このような格調の高い本を作成された編者、各著者ならびに出版社の関係者のご努力に深く敬意を表したい。

美作女子大学 江原 昭三

第5回日本ダニ学会大会報告

本年は新生、日本ダニ学会が発足して5年目という一つの節目を迎えた記念の大会であった。会期は1996年10月4日~6日、長崎県雲仙九州ホテルで開催された。

大会参加者は、当日参加を含め88名、同伴者4名を加えて計92名（男性79名、女性13名）で、雲仙温泉九州ホテルで合宿した。

初日は親睦テニス大会、編集委員会、評議員会の後、夕食に続いて海外調査のスライド映写3題（野田伸一・ケニアの調査から、角坂照貴・ロシアのツツガムシ調査、青木淳一・パヌアツダニ紀行一の各博士）が紹介された。2日目、第一席の講演に先だち、大会長の提案により去る1996年2月3日に急逝された山口昇先生の御冥福をお祈りして、参加者全員で黙禱をささげた。午前中の一般講演は、コナダニ、ツメダニ、ネダニ、ヒゲダニ、ケモチ



第5回日本ダニ学会大会記念写真（九州ホテル）

交通費、宿泊費が例年の大会よりも高くなったことをお詫び致します。それにも拘わらず、韓国からの李先生御夫妻をはじめ、多数出席していただいて有難いことであった。

大会の運営に際し、開催地と大会事務局が離れていたため、大学キャンパス内の学生アルバイトなどの支援が困難で、極く限られたスタッフで運営することになり、不行届きの点が多かったことを反省している。ただ、スタッフの一員として、わざわざ東京からボランティア参加して運営に御協力下さった白坂、和田両博士、スライド係りを自主的に担当していただいた、茨城大、京大の方々には改めて厚くお礼を申し上げたい。

秋晴れの絶好の好天に恵まれ、室内で座ったきりの会員の方々には気の毒であったが、2日目に計画した島原水無川周辺と仁田峠からの普賢岳見学には4名の御夫人方が参加され、御四方の日頃のおこないの良さが天に通じて、珍しいほどの雲一つない晴天の一日となり、初秋の雲仙を満喫していただいたと聞く。また、50冊用意された青木先生の近著、「ダニにまつわる話」筑摩書房刊は、またたく間に売り切れとなった。

特別講演の黒佐先生、御参加下さった会員の方々、大会の状況をスナップ写真に記録して下さった、高尾善則博士に主催者として心よりお礼を申し上げ、来年、筑波での第6回大会で再びお会いできることを楽しみに、大会報告とさせていただきます。

第5回日本ダニ学会大会長
長崎大学熱帯医学研究所 鈴木 博